

2023 年度秋学期授業アンケート 文学部長コメント

【文学部の調査結果に関するコメント】

文学部長 寺田 俊郎教授

各学科科目のアンケート結果、文学部科目のアンケート結果、いずれも全学の平均またはそれ以上の結果を得ており、総じて良好な授業運営がなされ、教員の意図が学生に伝わり、また学生がそれに応えていることが窺われる。また、どの学科においても教員がアンケート結果を真摯に受け止め、授業のあり方を見直して改善を行ったり、励ましを感じて自信を深めたりしており、アンケートの積極的な効果が表れている。

アンケートの項目のうち相対的に評価が低かったものとして、多くの学科・学部に通じているのは「アクティブラーニング」と「将来の応用」であることが注意を引く。

「アクティブラーニング」に関しては、一方で学生のニーズが高いこと、他方で授業の内容や形態によっては実施が難しいこと、が複数の学科によって指摘されている。工夫によって対処できる面もあれば、科目の性質および授業の形態のため容易に対処できない面もあるが、いずれにせよその本意を見失わない対処が求められていよう。すなわち、学生が主体的に学ぶことである。

また、「将来の応用」に関しては、それこそ学生に主体性の問題もあり、また基盤教育の主眼である「学び続ける力」にも関連することでもあって、科目担当者のみの責任に帰せられるものではないが、短期的（学科のカリキュラム内）および長期的（卒業後の人生）に、当該科目を学ぶことの意義を学生に理解させることは、大切なことだと考えられる。

アンケートのあり方に関する問題点も指摘されている。科目の趣旨や性質、授業の規模や形態の相違を無視して一律に設問を課すこと、教員の課題に関する設問と学生の課題に関する設問が混在していること、などである。また、今回は指摘されなかったが前回指摘された、学生がアンケート疲れに陥っているという問題も、依然考慮すべきであろう。いずれにせよ、授業アンケートは、よりよい教育を実現するための手段として実施されるのであって、自己目的化したり、顧客サービスの一環になったりしないように気をつけるべきことは言うまでもない。

2023 年度秋学期授業アンケート FD 委員会文学部選出委員コメント

【文学部の調査結果に関するコメント】

23 年度文学部選出 FD 委員 山口 和彦教授

文学部所属の各教員および各学科長から寄せられたコメントでは、アクティヴ・ラーニングに関する Q4 への反応が目立って多かった印象である。数値化されるアンケートの項目のなかで最も具体的に考えられることがその理由であろうが、実際に、個々の教員も授業内での実践に工夫を重ねたり、苦慮されていることが分かる（ちなみに、自由記述欄である Q13 と Q14 が最も参考になるという意見は根強い）。

アクティヴ・ラーニングは、ディスカッション、プレゼンテーション、ペアワーク、グループワーク、フィールドワーク、リアクションペーパー、Moodle を使用したアクティビティなど、形式は多岐にわたり、その定義もやや曖昧かつ流儀的だが、いずれにせよ、アクティヴ・ラーニングを含む授業は含まれない授業に対して評価が高いというアンケート結果が前年度までと同様に表れている。このことは、学生主体のアクティヴ・ラーニングに対する教員からの効果的なフィードバック（リアクションペーパーへのコメントなど）やさらなる学習への導き（発展的な問いや課題の導入など）の重要性を学生も教員も共有していることと連動しているように思われる。

他方、クラスの形式と規模の問題が解消されない問題として残っていることも多くの教員が指摘しているところである。例えば、ディスカッションはクラス規模が小さい演習科目では実践しやすく時間も取りやすい一方で、中規模から大規模の講義科目では実践が難しく時間も取りにくいという現実もうかがえる。知識伝達が優先される講義の大規模クラスで実践した教員もいるが、フィードバックの難しさは解消されていないようだ。中・大規模授業におけるフィードバックの難しさについては、ディスカッションばかりでなく、例えばリアクションペーパーなど、きめ細かいコメントを頻繁に返却することの現実的な困難や限界があることもあらためて確認できる。

アクティヴ・ラーニングと授業内容（テキストの選択を含む）の難易度との関連、学生の関心、および課題の質や量について、さまざまな意見が出てきたことは注目に値するだろう。講義内容やテキストの難しさが学生の意欲をそいでしまうという印象を持つ教員がいる一方、難解な内容やテキストを分かりやすく学生に伝えるためにはどのような工夫が必要なのか苦慮する教員もいる。学生間、学生と教員、グループ間など、さまざまな方向の活動を重視するアクティヴ・ラーニングの課題の出し方を改善することで、学生の関心を喚起するための方法を模索し続けている教員も多い。その一方で、アクティヴ・ラーニングの課題を大量に出すことで学生側の負担を必要以上に大きくしているのではないかと懸念する意見もあった。

さまざまな課題はあるものの、学生と教員が協働で活気ある授業を創り出していくためのアイデアを出し続けていくこと、真のアクティヴ・ラーニングとは何かについて考える続けることの重要性についての示唆が、今回の授業アンケートと教員コメントでは印象的であった。

2023 年度秋学期授業アンケート 学科長コメント

【哲学科】

哲学科長 鈴木 伸国 教授

教員ごとに回答内容はさまざまであった。一定数、学生アンケートに意義に見出さない教員もいるように見受けられた。他方、好評を得た科目に励ましを感じ、修正意見のあった科目の手直しに力を入れようとする教員も見受けられた。

哲学科は提供する科目の難度が多様であり、難易度の高い科目を担当する教員からは、その難度に応じたアンケート回答を受け取り、アンケートについてただ「難しい」という以外の回答をもとめる必要があるとのコメントがあったように見える。

全体としてはアンケートは有効に機能しているように見受けられた。

【史学科】

史学科長 坂野 正則 教授

史学科の大学授業アンケートの集計を見ると、「教員の説明はわかりやすかった」「教員の意欲を感じた」「教員からのフィードバックの機会があった」といった点について、すべて 50% を超える結果となっており、学科開講科目の基本的な教員の FD に対する意識と具体的な工夫はうまくいっていると考えているし、各教員の認識もそれを示している。この傾向は、今後も継続していきたい。

その一方で、全体の授業アンケートからも課題が見えてくる。とくに、「学生同士で議論を行ったり、プレゼンテーションをしたりする等のアクティブ・ラーニングの機会があった」や「シラバスの到達目標が身についた」の項目が相対的に低い部分は気になる。また、教員のコメントからは、専任教員の科目ではないが、非常勤講師のオムニバス講義については授業内容への不満も見られるというところは注視したい。ただ、学科としても今後検討課題としていきたいと思う反面、授業科目のアンケート実施自体に課題があるようにも思われる。史学科の場合、受講者人数が 70 名を超えるような比較的規模の大きな講義形式の授業と、15 名以下に人数が絞られる演習形式の授業が混在している。したがって、それらを一律にアンケート実施することに困難がある。たとえば、Q4 のような質問は 30 名以下の授業などに限定した質問にした方が、より現実に即した意見がくみ取れるように思われる。やはり、それぞれの受講人数や開講形式に即した授業ごとのねらいや形態、およびカリキュラム上の位置づけを考慮せずに、同じ設問をすることにはアンケートの実効性を下げることにつながるように考えられる。

ところで、大学授業アンケートで毎回、アクティブ・ラーニングの工夫や改善が求められる一方で、教員と学生の双方から、本学の Moodle システムは、仕様上、不便な点、使いづらい点が多々あるという意見も多い。FD 委員会が情報システム室と密な連携を取りつつ改善されることを期待するとの意見も学科教員からは寄せられている。

最後に、学生授業アンケートの設問について学科教員から出た再検討の要望で閉じたい。このアンケートは教員の取り組みを査定するのか、学生の取り組み（積極性）を調査しようとしているのか判然としない。二つの切り離して考えるべき質問が混在している印象を受ける。例えば Q11 のように、教員アンケートに学生の学習時間を問う項目をおいているのはどういうことなのだろうか。問いの再検討を求めたい、とのことである。

【国文学科】

国文学科長 福井 辰彦 教授

総体的に見て、好意的な評価が多数を占めていた。のみならず、自由記述などから、意欲的な学生の姿勢や、教員の意図がよく伝わっていることなども読み取れたようで、本学科の授業においては、教員と学生の間、一定の相互理解・相互信頼が醸成されているものと評価できる。

個別・具体的な要望に関しては、各教員が真摯に受け止め、誠実に対応しようとしていることも見て取れる。

本学科のような文献学の分野では、一人一人がどう読み、どう考えるか、といったことの前に、どのようには読み得ないか、どう読めば誤りや過剰な読みを避けられるかが、まず問われるべきであり、読みの輪郭線を、できるだけ精確に、過不足なく描き出すための知識・技能・学問的手続の教授が教育の基本となる。したがって、所謂「アクティブラーニング」なるものが、そもそも馴染まない側面があり、毎回悩みの種となっている。

それでも各教員は、それぞれ工夫を重ね、実践の試みを続けていることも分かった。

一方で、アンケートそのものが、画一的で、各学科やその専門性に対する理解や敬意を欠いたものになっている、という意見も見られる。また、回収率にむやみにこだわる割に、なぜ回答してもらえないのか、学生の心理やアンケートそのものの問題には目が向けられない点も指摘されている。

「お客様」のニーズを聞き、理想・哲学・伝統・倫理などといったことは二の次、とにかくそれに合わせて売ることを至上命題にする商品や工業製品と、学問・教育を同じように扱って良いなどと言う錯誤に、そろそろ気づいても良い頃だという気もするのだが。

【英文学科】

英文学科長 松本 朗 教授

アンケートの回答率は 55%で、英文学科の授業評価は、すべての項目において全体を 0.1 程度上回る結果となっている。アクティブ・ラーニングの要素に関する評価がやや低い点についても例年どおりの結果であった。当該科目で学ぶ内容が卒業後に役立つか、という問いについてもやや低い評価を受けているが、これについては、設問自体に疑問を付す教員もあった。

個々の教員のコメントを見ると、学生の評価が低くなる要因として、(i) 授業で扱う文学テキストが難しい、(ii) グループ・ワークやペア・ワークがあまりない、(iii) 課題にたいして教員からのフィードバックがあまりない、(iv) 授業で学ぶ内容が多すぎる、(v) 学生の関心や習熟度にあわせて、学期の途中で授業内容やレベルを調整することも必要ではあるが、シラバスに記されている授業予定から大幅な変更があると、授業全体が混乱している印象を与えてしまう、(vi) 学生が、教員のちょっとした言葉遣いに不快感を示す場合がある（教員が男子学生を「～君」と呼び、女子学生を「～さん」と呼ぶことは、ジェンダーにかんする配慮が不足していると思われる場合もある等）等が挙げられている。したがって、来年度のシラバス作成や授業準備の段階から、学生の習熟度やレベルを考慮しつつ、学生が関心をもつようなトピックが扱われた教材を選び、グループ・ワークやペア・ワークをとりいれ、課題にたいしてできるだけフィードバックをしていくことを心がけること等が求められていると思われる。いずれも、学生の質（気質を含めて）や、社会が大学に求めることが以前からは少し変化していることを考えれば、対応せざるをえないかもしれない。

より大きな問題は、こうした状況があることを踏まえつつ、3つのポリシーをいかに微調整し、また、カリキュラムのアップデートを多少行うか、ということにあると思われる。大学からの要請は理解できるが、教員のコメントを読むかぎりでは、授業評価アンケートをまじめに捉える教員とそれに懐疑的な教員、学生の肯定的なコメントを自分への励ましと捉える教員と学生の学習意欲に不満がある教員、フィードバックを求める声に理解を示す教員とそれは時間的に難しいと考える教員がいる等、授業評価アンケートにたいする教員の姿勢にも違いがあるため、学科内で合意形成をしてカリキュラムを大きく修正することは容易ではないように思われる。とはいえ、受験生の獲得を考えれば、魅力的なカリキュラムに見せることは重要であり、可能な範囲で調整を行いたい。

【ドイツ文学科】

ドイツ文学科長 中井 真之 教授

各教員がアンケート結果を踏まえて、担当科目における教材の選択、授業運営の仕方等を評価し、必要に応じて今後の取り組み方の変更を考えていることを確認した。

本学科の平均値は全体平均値をほぼすべての項目で上回っているが、Q5の「学修した内容が在学中もしくは卒業後にどのように応用されるかを学ぶ機会があった」のみ全体平均値を下回った。科目によっては卒業後にすぐに応用される内容のものではないものもあるが、在学中の授業カリキュラムにおいて、その科目がどのような位置づけにあるかを受講者に伝える必要があると考える。

また Q4のアクティブ・ラーニングの機会に関してだが、文法の習得や読解能力の育成を内容とする語学科目においては、その機会を増やすことは、かえって科目の目的にそぐわないこともあると考える。（科目の内容や性質に応じて設問を変える必要があるであろう。）

【フランス文学科】

フランス文学科長 博多 かおる 教授

全体的に大学全体の平均と数値が重なっており、多くの授業の趣旨は伝わり、学生の学ぶ意欲に応えられていると考えられる。

アクティヴ・ラーニングについて、学生同士のディスカッションなどの機会を増やしたところ、そうした機会を持ったことを肯定的に評価する学生が多くいたとの声もあった。またテキストの解釈に関して学生からなるべく多く意見を出してもらい、添削や小レポートへのコメントを含め、フィードバックを行うことに関してかなりの努力を行なった結果、「知識を相互に結びつけることにより、多様なものの味方や考え方が身についた」と考えている学生が増えたとの意見もあった。相互方向に機能する授業を実現するために、教員間でも意見交換を行い、さらに工夫を凝らしていきたい。

また複数の教員が関わるフランス語の授業の一部において全体的に値が低かったことに関しては、教員間の役割分担、連携等が十分に機能していないのではないかと教員からの指摘もあった。教員間の連携を今後改善していくとともに、とくに1年生の授業については教科書や授業方法について議論していきたい。さらに、語学の授業の一部において「思考する力がついた」「自分なりの目的を意識して持続的に取り組んだ」といった項目の値がやや低いことから、受講態度が受け身になりがちであることが危惧されるため、語学においても思考力を磨いていけるような内容を工夫するとともに、すべての授業において、学生が自ら目標をもって取り組むことができるよう促していくことが必要だと考える。

全体的に、教員の熱意と工夫、授業の意義は学生に理解されていると判断し、課題がみつかった部分については学科での話し合いをもとに改善していくつもりである。

【新聞学科】

新聞学科長 阿部 るり 教授

新聞学科としての全体集計については、アクティブラーニングの項目を除くすべての項目において全体平均値よりも高い数値が結果として示されている。授業満足度についても、学科平均値が 4.5 という結果であり、新聞学科の授業に対する満足度は全般的に高い傾向にあると言えるだろう。

学科教員のコメントに基づき、①授業の在り方、②学生の傾向、以上 2 点から現状の分析、傾向の把握を以下の通り行った。

①授業の在り方

*受講者数の少ない講義や演習ほど、受講者の満足度が高い傾向にあるが、受講者が 100 名を超える大規模クラスでは、相対的に満足度が低く出る傾向にある。

*ディスカッションや意見を述べる機会の多い授業が比較的高く評価された一方、フィードバックの少ない講義は低く評価される傾向が見られた。

以上からは、規模が大きい授業についてもディスカッション、意見を述べる機会を多くすること、フィードバックを改善、充実させることによって授業への参加（意識）を促し、満足度を上げられる余地があることも見えてきた。

②学生の傾向

近年の学生について「二極化」の傾向にあるとの指摘があった。学習意識の高い学生と低い学生の差が大きいこと、学習意識の低い学生を底上げしながら、学習意識の高い学生の期待に応えることの両立が難しいこと、大規模講義における学生の理解度の低下傾向がみられることなども、教員のコメントから見えてきた学生の現状である。

以上のような傾向があることを受けて、今後、より具体的な授業改善を行っていく必要があると考える。同時に、アンケートの回答率を上げることにについては多くの教員から指摘があったため、この部分の改善も重要であると考え。今後は、調査結果を踏まえ、学生が興味、関心をもって受講できるような授業運営の在り方を学科としてさらに検討していきたい。

【文学部横断プログラム】

文学部長 寺田 俊郎 教授

文学部横断型プログラム全体の数字を見る限り、全学の平均とほぼ同じ評価であり、問題なく授業が実施されたことが窺われる。

平均値を僅かに下回ったのは、フィードバック、アクティヴ・ラーニング、将来の応用の三つの項目である。この内最後の点は授業を通して学生自身が見出すべきものであり、措くとしても、前の二点は、輪講科目としては難しい課題である。1～2回で講師が変わるため、授業中のフィードバックやアクティヴ・ラーニングが難しいからである。授業後のオンラインによるフィードバックや授業中のペア・ワークなどのアクティヴ・ラーニングを工夫するべきかもしれない。

平均値を上回ったのは知的刺激の項目である。これは、自由記述の欄を合わせて考えると、横断型プログラムならではの学際的な講義を通じて多様な知的刺激を受けたことが大きな要因と考えられる。当プログラムの目標が達せられていることの証であり、たいへん喜ばしい。

自由記述を見る限り、上述のような知的刺激を受けながら、学生が意欲をもって受講している様子が窺われ、当プログラムの存在意義を改めて感じさせられる。

所属学科 文学部哲学科

氏名 教員①

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

コメントなし

2. 今後の具体的対応策など

所属学科 哲学科
氏名 教員②

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

講師側の視点ではわからない指摘がいくつもあった。
昨年度から工夫をしている授業もあり、その変化が反映さ入れている感触があった。

2. 今後の具体的対応策など

課題の多寡は、学生側の負担と、達成目標の相関となるが、学生の実生活上の学習以外の負担も視野に入れて、慎重に調整してゆきたい。

所属学科 哲学科

氏名 教員③

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

予想される範囲の回答状況であった。

2. 今後の具体的対応策など

妥当と思われる意見には適宜対応する。

所属学科 哲学科

氏名 教員④

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

きわめて難解な授業であり、学生に負荷をかけていることは承知している。しかし、学生にそれまで習得した哲学史的知識を体系的な思考へと形成させるには、この方法が（テキスト、参考書を敢えて使わないという手法）最善であることを確信している。

アンケート回収率が必ずしも高くはないために、コメントがしづらい点はあるが、回答を見るかぎりでは、科目担当者の意図は学生側に伝わっていると思われる。

2. 今後の具体的対応策など

方法としては現行のままで行く予定である。moodle では音源（2020 年度のオンデマンド教材＜担当者の音声＞）を参考資料として掲示しつづけ、毎回の鍵概念をも書き込むという仕方で、履修者の理解の深化を図りたい。また履修者のなかに、授業内での質疑応答の希望があれば、これに積極的に応えていく用意がある。

所属学科 哲学科
氏名 教員⑤

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

各授業の趣旨がおおむねよく理解されており、安堵している。授業中の意見交換や討論は時間的に豊富とは言えないが、受講生が好意的に取り組んでいることがわかり、嬉しい。事前・事後学習の課題は十分な量を明確な指示とともに課したつもりだったが、それが反映されない結果になっていることが気になる。

2. 今後の具体的対応策など

授業中の意見交換や討論をいつも同じ相手ではなく、多様な相手とできる工夫をしたい。事前・事後学習の課題の成果の確認の方法を工夫したい。

所属学科 哲学科

氏名 教員⑥

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

学生からの貴重な意見を踏まえ、今後の授業改善に努めていきたい。授業内容や構成について多くのポジティブなフィードバックがあり、大変嬉しく思う。特に、論理学の授業について、その構成や面白さに対する高評価は励みになった。また、議論を通じて思考を深められたという意見から、参加型の授業の重要性を再認識した。

授業の内容や構成に関する高評価は、学習目標の方向性が概ね正しいことを示しているように思われる。特に、論理学の授業では、学生が興味を持ち、理解しやすいよう工夫を重ねてきたが、その成果が実感できたのは非常に喜ばしい。また、演習科目では、議論を通じて学生が考えを深める機会を持てたといった多くの肯定的な意見を得ており、学生にとって有意義であったことを示している。

一方で、一部の学生から授業がわかりにくいとの指摘もあった。このような意見は、授業のさらなる改善に向けた貴重なヒントとなる。難解だった箇所、資料が理解を助けるものではなかった部分について精査したい。

2. 今後の具体的対応策など

授業がわかりにくかったという一部の指摘に対しては、授業資料の内容を一層充実させることで改善していきたいと考えている。特に、授業で扱う分野に馴染みのない学生にもわかりやすいよう、初等的な話題や具体例を多く取り入れるなど、理解しやすい工夫を行いたい。また、難解な部分については補足説明を加え、学生が自分のペースで復習できるようにしたい。

欠席した学生へのフォローとして、授業スライドを迅速に共有することを徹底したい。これにより、欠席した場合でも次回の授業内容についていくことができるだろう。欠席時に生じてしまう学習の遅れを最小限に抑えたい。また、スライドだけでなく、授業の要点をまとめた補足資料も提供し、理解をサポートする予定である。

グループディスカッションの効果についても肯定的な意見があった。今後も積極的にグループワークを取り入れたい。学生同士の意見交換を促進し、多角的な視点から議論を深めることで、より豊かな学びを提供していきたい。また、ディスカッションの際には、全員が参加しやすいように工夫し、活発な議論が行える雰囲気を作っていきたい。

所属学科 哲学科
氏名 教員⑦

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

やはり幾つかの科目（「宗教哲学」や「ドイツ語文献講読」）で、説明のわかりやすさという点で、受講学生一般に十分に内容が消化されにくい傾向が残存している。昨年度よりかなりこの観点からの改善がみられるようだが、要望の中には「抽象的な概念を具体的な言葉でわかるように説明してもらいたい」という意見もあった。ドイツ語文献講読などでは、邦訳のない専門的な哲学のテキスト読解を主たる授業内容としているので、原文の読解に加えて、解釈を通しての理解により重点が置かれるように方向づける必要がある。

〈学習した内容の卒業後の（社会生活での）応用〉というポイントについては、そもそも哲学の営みの深化および哲学教育はそのような〈応用〉や〈適用〉と原本的に何の関係もないので、実用化の目ざす実学とは全く区別されるべきである。ただし、「西洋倫理思想史」や「哲学演習Ⅱ（倫理）」に関しては、一定のテーマ内では今日の歴史的世界の動向において如何に生を實踐してゆくかに向けての省察が大きな意味をもち、授業内容にも含み込まれている重点の一つである。

2. 今後の具体的対応策など

哲学の思考の道筋をより丁寧に（ある場合には、可能な限り具体的現実の脈絡からの事例を引用して）解きほぐしつつ開明できるように、さらに授業準備を徹底化したい。文献講読のテキスト選択に関しては、単にわかりやすい内容を採択するのでは受講者学生の読解レベルの発展に資することにはならないが、理解を発酵させる上でふさわしい内容を精選するように心掛ける。さらに十分に時間をかけて、読解内容を吟味してゆけるために補助的な文献を活用するようにする。

所属学科 _____ 史学科 _____

氏名 _____ 教員① _____

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

おおむね学生には満足してもらっている部分が多いようなので、引き続き、努力していきたい。

2. 今後の具体的対応策など

「ヨーロッパ・アメリカ史系概説 III」では、レジюмеが見にくいという意見があったので、見やすいレジюмеや資料の作成に留意したいと思う。

所属学科 史学科

氏名 教員②

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

講義授業については、ほぼ学部科目の平均値と同じであり、標準的な授業であったと評価できる。受講生の感想も、「わかりやすかった」「面白かった」といった、おおむね好意的なものばかりであった。ただし、コーディネイターのみを務め、実質的な講義に参加していない「外国史」（非常勤講師のオムニバス講義）については、学部科目の平均値をやや下回り、授業内容への不満も見られ、改善の余地がある。

2. 今後の具体的対応策など

Q4 は、少人数の演習には欠かせないが、大人数の講義授業にはあまりふさわしくないように思う。授業ごとのねらいや形態、およびカリキュラム上の位置づけを考慮せずに、一律に硬直した同じ設問をすることには疑問である。

なお、上記の「外国史」については、次年度以降、私はコーディネイターから外れるので、アンケート結果について次年度以降のコーディネイターに引き継ぐことにする。

所属学科 文学部史学科

氏名 教員③

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

FD アンケートへの回答を、ありがとうございます。

回答結果の全般的な傾向は、授業を行っている時に感じていた手応えと一致しており、こちらの熱意や工夫が伝わったようで嬉しく思います。

ただし、履修者の自己評価の欄には低いポイントが散見されました。こちらとしても、学生がそのポテンシャルにふさわしいアカデミック・パフォーマンスを発揮できていないのではないかと危惧していたところです。これは教員や一授業でどうにかなる問題ではありませんが、可能な限りエンカレッジメントに努めたいと思います。

2. 今後の具体的対応策など

総合的に評価した上で、授業の方針や基本的な制度設計は踏襲して行きたいと思います。

ブラッシュアップとしては、レジュメや課題等の教材の改善に努めたいと思います。特に Moodle を使用した課題については、より効果的な作問に取り組みたいと思っています。

ただ、上智大学の Moodle は仕様上、不便な点、使いづらい点が多々あります。FD 委員会が情報システム室と密な連携を取りつつ改善されることを期待します。

所属学科 史学科
氏名 教員④

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

- ・回答率の低さ（平均で約 37%）には少し驚いたが、授業内でアンケートのための時間を取り損ねてしまったのが問題だろう。
- ・（致し方ないことだったとはいえ）科目の性質と潜在的受講者の事前情報が不十分で、開講時に予定の 3 倍を優に超える受講者を前にかなり困惑してしまった。授業運営にも影響が出たため、受講希望者・受講者を戸惑わせてしまったことは大変残念である。

2. 今後の具体的対応策など

- ・回収率の改善に向けては、授業内に忘れずに時間を確保できるように、配付資料やスライドにあらかじめ組み込むようにしていきたい。
- ・初めて担当する科目については複数方面からの事前情報収集に努め、授業運営方法と受講者数とにミスマッチが出ないように心がけたい。

所属学科 文学部史学科

氏名 教員⑤

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

二つの授業についてのアンケート結果である。

ひとつはおよそ 70 名の講義、もう一つは 11 名の演習（ゼミ）である。

一般講義においては、学生のフィードバックは moodle のリアクション程度にとどめているため、その数値が低いのは理解できる。また、少人数のゼミでは高得点となる可能性が高いため、やはり一対一の局面が多いためと考えられる。

いずれにしても、学部科目平均より上回った点であったことはひとつの安心材料である。

毎回、アンケートをうけてコメントをかきこんでいるが、このアンケートは教員の取り組みを査定しようとしているのか、学生の取り組み（積極性）を問おうとしているのか判然としない。二つの切り離して考えるべき質問が混在している。例えば Q11 のように、教員アンケートに学生の学習時間を問う項目をおいているのはどういうことか。それを総体的にみるダイアグラムのなかに組んでいる意味がわからない。問いの再検討を求めたい。

2. 今後の具体的対応策など

今回のアンケート結果をうけ、やはり講義においても何らかのフィードバックの工夫は必要と思われるので参考とする。

ゼミについては、学生の自主性がかなり重視される科目であることも鑑みて、よりアクティブな姿勢が生じるような工夫を講じたい。

学術書や研究文献を読んで、その要旨やリアクションを発表するという従来のやりかたのみでは、学生の興味を喚起しにくい点も考慮する。

たとえば、自分を雑誌編集記者にたとえてあるテーマを選んで「雑誌記事」を書いてみる。あるいは自分の専門分野の題材をもちいて短編小説を書く。歴史ドラマの考証を実際行わせるなど。実際の社会でおこなわれているような歴史学を基盤としたシチュエーションを想定する実習を取り入れることに効果があると思うので、実施してみたい。そうした具体的な作業を通して、歴史の面白さや、意義を問う演習が展開できるよう心掛けたい。

所属学科 文学部史学科
氏名 教員⑥

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

授業内容について、こちらが伝えたかった内容や、授業方法については概ね受講生に受け入れてもらえたと考えている。

少数ではあるが、自由記述として寄せられたコメントについては大変参考になった。的確に授業運営の問題点を指摘したコメントもあった。自分自身、改善の必要があるのではないかと感じていた点でもあり、学生から指摘を受けたことで、積極的に方法改善に取り組んでいこうという意識が高まった。

2. 今後の具体的対応策など

アンケート結果を受けて、講義授業については「アクティブラーニング」の要素が不足していると考え、2024 年度授業から新しい対応をすでに取り入れている。

具体的には、アンケートの中に「ディスカッション/学生同士の意見交換の時間を設けてほしかった」という意見があった。100 人近い講義授業であったため、正直、要求自体に違和感を抱いたが、学生自身がその方が学習内容の定着、深い学びに結びつくと考えている以上、意見を取り入れてみることにした。講義時間内に数分であるが、学生同士で問題点について意見交換する時間を設けてみたところ、学生の手応えも高まり予想以上に効果的であることが実感できた。

所属学科 史学科

氏名 教員⑦

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

こちらの熱意が伝わっているようで、その点は、率直にうれしい。
ただ、改善すべき点もあり、引き続き教材や授業方法の改善につとめたいと思う。

2. 今後の具体的対応策など

講義科目におけるアクティブラーニングが不足しているようなので、講義科目の授業の一部を双方向型にできないか、検討したい。

所属学科 文学部史学科
氏名 教員⑧

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

学生との距離が近いプレゼミ・ゼミについては、例によって学生側の遠慮があると思われる、正確な回答結果が出ているかどうかは分からない。引き続き、指導学生との信頼関係を築いてゆくこと、きめ細やかな指導、誰でも発言しやすい雰囲気作りに努めたい。

「歴史学入門演習」については、従来の方法が奏功しており、やはり各担当教員の細やかな配慮、運営次第であろうと思われる。

「歴史学特講（日本仏教史）」については、あまり受講生どうしの意見交換の時間を設けることができず、その点受講生たちには物足りなかったようである。今期は校務負担が過重で、授業準備・フィードバックとも、十分にできていたか心許ない。改善策は分かっているが、その時間を割けないのが現状であり、情けない限りである。

2. 今後の具体的対応策など

昨年度の教訓を踏まえて、今年度はシバラスを大きく改変し、受講生のワークに大きな時間を割いている。教授すべき情報量との関係で省略してしまう場合もあるが、実施したほうが理解が深まることは確認できており、今後も可能な限り続けてゆきたい。

しかし、今後数年の間に単位実質化の取り組みがなされるなかで、授業中にワークの時間を設けることが果たして必要なのかどうかは、引き続き議論してゆくべきと考える。授業の前後に合計 190 分の学習時間を要する、具体的な課題が設定されるため、インプットとアウトプットのバランスが崩れる恐れもあるからである。今後カリキュラムが変更になるなかで、アンケートの項目も修正してゆかねばならないのではないかな。

所属学科 国文学科
氏名 教員①

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

好意的な感想が数件あり、改善を要望するようなコメントはなかった。設問に関しては、こうした設問を設定することが、恣意的に授業の形を縛るものとなっていると思う。また、数値で示されても、いったいそれをどう受け止めればよいのか分からない設問も多い。意欲を持って授業に臨んでいるが、「ややあてはまる」と言われて、「やや」とはなんだろうか。その結果を見ていったい何を感じればよいのであろう。

2. 今後の具体的対応策など

毎年同じ内容の必修授業については、毎回の授業で反応を見ながら、説明の順序を変えたり、教材を入れ替えたり、毎年微調整を行っている。演習や特講は毎年新しいことを扱うのでチャレンジである。シラバス通りにいく時もいかない時もあるだろう。

所属学科	国文学科
氏名	教員②

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

1. Q4 は、人文系の講義科目には馴染まない。今後外してほしい。
2. 専門性の高い高学年の演習・特講については、意志をもって選択して受講している為もあって、相応の評価をうけているが、1 年次の基礎科目は学年の九割以上が履修していることもあり、この分野に関心の無い受講生も多いせいか、理解度の差も激しい事がわかった。

2. 今後の具体的対応策など

必修的な基礎科目に於いて、やる気の無い学生にいかに関機づけをするかを考慮しながら講義することを心がけたい。

所属学科 国文学科

氏名 教員③

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

いつもながら Q13 と 14 の自由記述欄が参考になった。アンケートはこのパートとだけでも良いのではないかと、いつも思う。

具体的には、演習の講義で入念な調査と考察を行った人と杜撰な調べで済ませた人とは、同じ単位数になることへの疑念が書かれており、考えさせられた。当然、成績評価に反映されて、前者は良い評価、後者は悪い評価となるわけであるが、単位数は同じ 2 単位である。A 評価の場合は 3 単位にカウントするというようなことは教務的に難しいであろうが、確かに同じ単位数であることは、当事者にとっては納得のゆかぬことなのかもしれない。

2. 今後の具体的対応策など

調査課題を出した際に、関係する書籍が図書館から借り出されていて使えなかったというコメントがあった。リザーブの扱いにすると、調べるべき図書を事前に教えているのと同じことになるので、いかに対処するか悩ましいところである。次年度までに対策を考慮したい。講義時には「図書は借りずに、必要な部分をコピーや写メをしなさい」と申し伝えてあるが、利己的な不屈き者はいるようである。

所属学科 文学部国文学科

氏名 教員④

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

全体的に質問 4（プレゼンテーションやアクティブ・ラーニングの機会）の評価が低いが、演習では、学部科目の平均より高い値となっているので、授業のタイプによる相違と考える。学部の必修科目の場合は、知識を伝達する必要があるので、どうしても双方向の活動が抑制される。

授業内容については、リアクションペーパーへのフィードバックが一定の評価を得ているようなので、今後も続けたい。

また蘭学資料を用いた授業については、やや難しいかと思ったが、興味を持つ学生もいたようで幸いである。

なお、他学科の学生から難易度に関する率直な意見が出たが、やはり国文学科の既習事項を前提として授業を進めるのはやむを得ないと考える。また、字が見えにくい点については、改善したい。

2. 今後の具体的対応策など

リアクションペーパーに関するフィードバックは、今後も続ける。

また、板書については、字の丁寧さ、大きさ、その他見やすさについて、配慮をしたいと思う。

所属学科	国文学科
氏名	教員⑤

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

怖怖アンケート結果に目を通したところ、素直にうれしいコメントが一つあった。それは「先生の授業の影響でたくさん古本を買った。おすすめの作品をたくさん読んでいきたいと思う」というものだ。本を読みたい、本を買いたいと学生に思ってもらいたいとの一心で授業を準備し運営していたため、このコメントは今後も授業を続けていく励みになった。

また Q4 に関して。私は講義形式の授業ではアクティブ・ラーニングは行っていない。とても生産的とは思えないからである。ただし事前に課題を課し、それを整理して授業内では共有している。つまり学生の意見を拾い上げるという意味では、擬似的にアクティブ・ラーニングを実践していたわけだが、その本質を理解してくれたのか、本設問に「とてもよくあてはまる」と回答している学生が幾人かいた。これも素直によろこばしく思った。問題点としては回答率の低さが目についた。これについては「今後の具体的対応策」で記述していきたい。

2. 今後の具体的対応策など

回答率の低さの改善に、具体的対応策をもって努めていこうと思う。私の場合、第十三回・第十四回の授業内でアンケートの趣旨を説明し、そのうえで回答のための時間もそれに設けたが、おまけにアンケートに怯える一教員としての泣き言も吐露してしまった。そのために遠慮させてしまったか、はたまたアンケートに回答することそれ自体にバカらしさを抱かせてしまったか、一年生の必修の授業は五割程度、特講や演習では答えた人間の方が珍しいという回答率だった。そこで具体的対応策としては強い気持ち・強い愛を持ち、泣き言をこぼすのはやめようとする次第である。

なお、さすがにアンケートの回答率を上げることを目標に、今後の授業を具体的に工夫していこうとは思わない。文学の授業で育むべきは、作中の微細の表現に目を向け全体を考察する力、そしてそこから文学とは何か、芸術とは何かについて、また人間・社会との関わりについて、自ら問うていく力だろう。そうした力を学生が身につけていく過程と、アンケートに対する回答欲求をふつふつと身の内に蓄えていく過程と、たしかに両立はするのだろうが、しかし私の乏しい才能は前者に百パーセント捧げたい。

また妙なたとえを用いるならば、お世辞にも美味しいとはいえないラーメン屋に出くわしてしまった際、どうか味を改善してくれとお願いする姿が大学生に似つかわしいもの

なのだろうか。二度と足を踏み入れまいと心に誓うか、さもないればその珍奇な味わいのうちに不思議な魅力を見出して一人悦に入るかだろう。回答率の低さの理由の一つに、授業改善アンケートに応じる自らの姿に学生自身ピンときていないという事情があるのではないか。もしそうであるなら、その感性は一人の人間としては非常に共感できるものである。また好悪の念を別とするにしても、それはそれで大学生として適切なありようの一つとして認めるべきもので、こちらが「改善」を強いるたちのものではないだろう。それも積極的に回答率を上げるように授業のありようを変えようと考えはしない理由である。

所属学科 国文学科

氏名 教員⑥

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

概ね良好な結果であると受け止めた。

いずれも少人数の授業であったことも影響していよう。

演習科目について、Q5～7 の値が低いが、授業の中では実践した内容。受講生がそれを意識できていないのであろう。ただ、あくまで中国古典語で書かれた文献をいかに精確に読解するか、その技能を身につけるための授業なので、Q5～7 のようなことが意識されていなくても特に問題はなく、またある程度は無意識に身につけているものとする。

2. 今後の具体的対応策など

対応を必要とするような結果ではないため、特になし。

所属学科 国文学科
氏名 教員⑦

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

各設問別の数値はだいたいにおいて平均程度を示しており、問題なく授業が行えていることが確認できた。フリーコメントの授業のよい点を答える記述からは、学生の高い意欲が感じられ、熱心に学ぼうとしてくれていることが分かった。

2. 今後の具体的対応策など

特講の授業など、講義の授業では、どうしてもアクティブラーニングの要素が少なくなってしまう。これは授業の性質上、仕方のないことであるが、授業の初めにリアクションペーパーのフィードバックをもう少し丁寧に行い、場合によっては学生同士が議論を行う場を設けるなど、試みたい。

所属学科	国文学科
氏名	教員⑧

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

とくに大きな問題はないように思われる。ただし、いっそう受講者の知的好奇心を高めるように工夫していく必要があると感じた。比較的演習の点数がよくないと思うので、大作を考えたい。

2. 今後の具体的対応策など

声の大きさについて改良を求めている感想があったので、覚えておきたい。印象に残るような授業をするように心掛けたい。

所属学科 英文学科

氏名 教員①

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

(1)演習科目については毎回全員があたるような予習を課しているが、学習時間の短い学生が一程度いるのが気になる。専門科目になると能力の差もかなり出てくるので、予習に必要な時間に差が出るのは仕方がないが、使用しているテキストのレベルに比して、学習時間が短かすぎるのは明らかである。

(2)英語のスキル科目については、一年次生の Reading & Research が週 2 回の科目であり、特に後期は授業内でのリーディング、課外活動としてのライティングを並行して行うのに適した時間割であり、その効果も一定程度認められるようである。ライティング課題の添削を通して、学生にフィードバックをおこなう機会が確保できていたのが、教員と学生双方にとってのメリットであると考えられる。

(3)2 年次生の Critical Reading を担当するのは初めてであったが、1 年次の頃と比べて学習意欲が激減していることに驚いた。予習にかける時間が圧倒的に少なく、授業中の受け答えからも学期末試験の結果からも、そのことは歴然としていて衝撃的であった。

2. 今後の具体的対応策など

(1) 全般、学生の勉学への意欲を掻き立てるような素材の選定、グループ・ワークの奨励、適度な回数的小テストの実施といった措置を講じていきたい。

(2) 特に 2 年次生の英語基礎科目については、課題を提出しない学生が一定度いたため、早い段階で注意喚起をし、課外学習の時間を十分にとるような指導を心掛けたい。

(3) 課題へのフィードバックは、添削のみに限らず、口頭での説明の時間をもう少し設けることによって、課題提出への意欲の向上に努めたい。

(4) 学生の呼び方についてはジェンダーを妙に意識過ぎるのも過剰反応かと思い、特に意識せずにさんづけ、君づけで呼んでいたが、以後はもう少し考えた対応をとっていきたい。

所属学科 英文学科

氏名 教員②

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

ディスカッションを好む学生が多い印象だが、演習ではない受講者数の多い講義の授業でもそのような時間を毎回つくるべきかは迷うところ。

Q5、「学習内容が在学中あるいは卒業後にどのように応用されるかを学ぶ機会があった」かどうかについては、文学作品を扱う授業における実践はなかなか難しいかもしれない。あるいは、この問い自体がやや実用主義的な回答を要求しているとも考えられる。

2. 今後の具体的対応策など

100 分の授業のなかで複数の作業を組み込み、受講者が飽きない工夫を考える。
授業のポイントをさらに明確化し、クリアに伝達することを心がける。

所属学科 英文学科

氏名 教員③

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

全体的にはほぼ学部平均となった。80 名を超えるサーベイコースで、「在学中もしくは卒業後にどのように応用されるか学ぶ機会があった」について平均を下回っている。入門的な内容だが、他の科目への応用をイメージしにくいのかもしれない。また、到達目標が身についたか、知的に刺激されたかについても、平均をわずかに下回っている。やはり概論的な内容であるが、工夫が必要である。一方でアクティブラーニングの機会については、学部の平均を上回るが、個別コメントでは「もっとアクティブラーニングの機会が欲しい」というコメントがあった。ディスカッションの機会なども織り込んだが、少人数での演習などと比較すると、足りないと思われるのだろう。大人数のサーベイコースでの課題である。良い点についての個別コメントでは説明が分かりやすいというものがほとんど。

2. 今後の具体的対応策など

量が多すぎるというコメントもあったので、カバーする内容をより精査し、選択するようにしたい。また、他の授業や社会での応用をイメージするためのディスカッションの機会を取り入れるようにする。

所属学科	英文学科
氏名	教員④

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

少人数の対面科目のアンケート回収率が 9 割程度であったのに対し、大人数のオンライン科目は 2 割程度であった。また、満足度等の結果も前者の方が総じてよかった。やはり少ない人数での対面授業で対話をしながら、フィードバック等の丁寧な指導をする方が学生にとっては学びがよいがあるようである。

2. 今後の具体的対応策など

学科平均に比して授業外学修の時間が短いので、適切な量の課題を毎回の授業ごとに課すよう心がけたい。

所属学科	英文学科
氏名	教員⑤

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

- ・いずれの科目についても、設問 4「学生同士で議論を行ったり、プレゼンテーションをしたりする等のアクティブ・ラーニングの機会があった」について、点数が低くなっている。
- ・学生の興味・関心にあわせて授業スケジュールを柔軟に変更したところ、「計画が定まらず、混乱している」と受け止める学生もいることが分かった。
- ・和訳のスピードが速すぎる、早口すぎるという意見があった。
- ・授業内に回答時間を設けることのできなかつた科目は、回答率の低さが顕著である。

2. 今後の具体的対応策など

- ・大人数の講義科目でアクティブ・ラーニングの機会を設けるのは困難だが、中規模クラスではグループ・ディスカッションを取り入れ、大規模クラスでもリアクション・ペーパーへの応答時間を増やす等の工夫をしたい。
- ・学生の興味・関心にあわせて授業計画を柔軟に変更することが一概に悪いこととはいえないが、授業全体の構成がどのようなものになっているのかの見取り図を適宜明示するようにしたい。
- ・とくに一方的なコミュニケーションになりがちな大規模クラスにおいては、講義のスピードを落とすよう気をつけたい。
- ・いずれの科目についても授業時間内に回答の時間を設けるよう気をつけたい。

所属学科	英文学科
氏名	教員⑥

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

- ①授業中に学生同士の意見交換の時間を設けた授業と、設けなかった授業があったが、学生は前者を好む傾向があり、これが授業全体の評価や満足度に直結する傾向があることが分かった。
- ②全ての授業でほぼ毎回学生の予習コメント等を提出させ、授業中に紹介してフィードバックする時間を取ったが、これは好評だったので継続したい。
- ③レポートの内容を授業中に丁寧にフィードバックしたものについては、レポートの書き方が分かったようで評判がよかったので、他の授業でもいづらか取り入れたいと思う。
- ④英語がやや難解な 19 世紀の短編作品を連続的に読んだ授業では、学生によって好みが多かったのに加え、テキストの難しさが学生の学習意欲を削いでしまった印象がある。授業の予習も不十分な学生が多かったため、テキスト選びに工夫が必要だと思った。

2. 今後の具体的対応策など

- ①については、今学期は全ての授業でほぼ毎回グループ・ディスカッションやペアワークの時間を設けるようにしている。
- ②については、ほとんどの授業で学生のコメントを毎回授業中に共有しているが、今後もこれは継続したい。その場でスクリーンに映して見せるだけでなく、ファイルを共有して欲しいと思っている学生が多いことが分かったので、現在ではどの授業に関しても、学生も moodle で他の受講者の書いた内容を見られる設定に変更している。
- ④について、19 世紀半ばの代表的作家の作品を授業で扱いたい、学生のモチベーションや好みも異なるため、英語が読みづらい作品を特に必修授業で扱うには工夫が必要だと感じる。短編の場合であれば Poe や Hawthorne といった作家だけを集中的に扱うのではなく、19 世紀末や 20 世紀初頭のリアリズム作家なども取り入れることによって、英語の問題をいづらか解消しつつ、時代の異なる作品を比較することで学生の作品理解を深めるようにしたいと計画している。

所属学科 英文学科

氏名 教員⑦

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

Special Topics in American Studies 2 に関しては、学部科目平均とほぼ同じ結果を得られた。また、「興味も広がって意欲が増えた」とコメントには励まされた。Translation Theory 1 に関しては、オンデマンド授業だったこともあり、質疑応答やフィードバックの機会という点で学部科目平均を下回ったことは残念である。

2. 今後の具体的対応策など

Special Topics in American Studies 2 に関しては、アクティブ・ラーニングがないという結果が出た。実際には学生に求めたのだが、反応がないので学期半ばで断念したのが事実であるが、今後は何らかの形で工夫して実施していきたい。また、授業内容が将来に応用されるかどうかやや点数が低かった。これに関しては説明を要するかもしれない。得られた。また、「興味も広がって意欲が増えた」とコメントには励まされた。Translation Theory 1 に関しては、今年度から対面授業になるので、改善されるはずである。

所属学科	英文学科
氏名	教員⑧

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

興味深く受講してくれているようで安心しましたが、講義科目でのペアワークが少ないとの指摘があったため、今後改善したい。

2. 今後の具体的対応策など

できるだけ、一方的な授業にならないよう、一層工夫に努めたい。

所属学科 英文学科

氏名 教員⑨

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

どの科目でも授業のわかりやすさに加えて復習しやすい授業資料の作成を心がけている。どの科目においてもこの点について肯定的な意見が多かったので、大変励みになった。引き続き充実した授業資料とわかりやすい授業展開を心がけたい。

教職協働イノベーション研究費の採択を受けて授業内容の刷新を続けている Morning English については、具体的な批判などが出たが、試行錯誤しながら授業内容の刷新をしている中では学生の声というのは大変ありがたいものである。特に Moodle の機能の制限に起因する問題は日常的に Moodle で課題を解いている学生たちからしか見えない問題でもあるので、授業内容の改善に結びつくよう有効利用していきたい。

2. 今後の具体的対応策など

Morning English の Moodle の機能の制限に起因する問題についてはすでに改善し、修正を加えた学習コンテンツを 2024 年度春学期から実施中である。

また、同科目のライティング課題に対するフィードバックを求める意見など、アクティブ・ラーニングをより実感したいというコメントが複数あった。Morning English はクラスサイズが 100 名を超える必修授業で個々人への細やかなフィードバックはあまり現実的ではないが、授業中に学生のライティングサンプルを添削するなど、持続可能な形式でフィードバックする方法を模索していく。

所属学科 英文学科

氏名 教員⑩

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

理解度、満足度は例年通り、まあまあ良いといったところであった。例年のことであるが、History of English Literature IV に関して「内容が難しい」というコメントが見られる。モダニズムを扱うときにはやや内容が難しくなってしまうが、工夫を重ねて学生の理解度が高まるようにしたい。また、English Studies Seminar において蝶々を収集することを趣味とするイギリスの下層中流階級の青年が女性を監禁して殺害してしまう小説（ジョン・ファウルズ『コレクター』）を扱っていて、私の不用意な発言でオタクを批判しているように感じて不快だった、と書いたコメントが 1 つあった。こうした可能性には注意していたつもりであるが、反省している。今年度以降は注意したい。

2. 今後の具体的対応策など

私はハンドアウトをプリントアウトして配布して、引用をじっくり読んでもらうことが重要だと考えているのだが、ハンドアウトを PDF にして Moodle で配布してほしいとの声が 1 つあった。これについては今後、検討していくが、自分の好みとのバランスをとることが難しいときもあると考えている。

例年、内容が難しいとのコメントがあるので、学生の理解度を上げるような工夫と努力を重ねていきたい。

所属学科 英文学科

氏名 教員①

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

Overall, the feedback has reaffirmed my commitment to continuous improvement in my teaching practices. It is evident that the students' engagement and comprehension are directly influenced by the methods and resources used in the classroom. Therefore, I am dedicated to incorporating these suggestions to create a more enriching and effective learning environment.

2. 今後の具体的対応策など

In response to the feedback, I have outlined several specific strategies to address the areas of improvement mentioned by the students.

Based on the feedback regarding assignment instructions, I will implement more detailed guidelines and step-by-step instructions for all assignments. Additionally, I plan to create rubrics that clearly outline the expectations and criteria for each task. This will help students better understand what is required and how to achieve their best results.

所属学科 ドイツ文学科
氏名 教員①

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

ふたつの授業に関して、アンケート結果をいただきました。これらは学科の必修科目またはそれに準じる扱いの科目であり、またこれまでも私自身の担当のさいに、アンケートの対象となってきた科目です。従来の結果とくらべて、特に大きく変わった点はありませんでした。ドイツ語科目（2年生対象）では、通常ひとり担当で週2回開講される場所、非常勤講師のかたと協同運営するかたちで授業をおこないました。それぞれが指定する教科書ないし課題を用いての授業でしたが、Q13の自由回答では、好意的な評価をいただいています。これは両教員が、さまざまなレベルの学生の理解度に合わせて個別対応を行ったことに対する評価と受け取っています。各学生に、自身の理解できていない部分（それが文法であれ、語彙であれ、あるいは文章の読解であれ）を認識させることで、今自分が何を学習すればよいのかを具体的に指導していくことを心がけていました。それによって学生は、今後のドイツ語学習の道筋が見えたのではないかと考えています。

もう一方の科目は卒業論文ゼミナールであり、元来各学生のモチベーションはきわめて高く、自身の発表内容に対して、その場で教員のアドバイスを受けられることはもちろん、他の学生の意見や感想が時をおかずして得られるため、本授業により、その後の論文執筆に大きなヒントを見いだせたということが、高く評価されたものと思います。

2. 今後の具体的対応策など

ドイツ語（作文・講読）の授業については、その特質上「議論」や「プレゼンテーション」の機会はおのずから限られ、また、個々の文法事項、読解についての指導が中心となるため、通常の演習形式の授業とは異なった（当該項目における「低い」）評価を受けることが多くなります。ただ本授業では、春学期のアンケート結果に基づいて、授業の運営方法や試験の形式を変更し、あるいは、協同して担当する教員との連携を深めながら授業を進めていく試みを行いました。その点を積極的に評価してくれたのがQ13の自由記述回答だと思います。一方で、ふたり担当の場合、（2冊の別のテキストを用いるため）学生に対して、より大きな要求を課する傾向があり、アンケート結果を踏まえ、その点については今後も改善の試みを重ねていきたいと考えています。

卒業論文ゼミナールに関しては、高評価を得ていることから、現在の方式を維持しつつ、論文執筆にとってより効果的なアドバイスの提供のしかたや、フィードバックの方法を模索していきたいと考えています。

所属学科 ドイツ文学科

氏名 教員②

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

2 年次生の語学科目では、個々の学生の得意・不得意や目的意識の差を見きわめつつ持続的に高い意欲を引き出していくことに難しさがあり、クラス内での前述の「差」が年々広がっているとも感じられるため、教材の使用手法や授業の運営方法によりきめ細かい工夫が必要になってきていると思われる。

演習科目については、質疑応答、協議に学生側がより慣れてきていると感じられ、その都度のテーマに学生同士の議論は活発に行われているが、議論が散漫に流れてしまわないよう、自由に議論させながらもより深い認識や新しい着眼点にたどりつけるような「きっかけ作り」に工夫が必要であろうと思われる。

2. 今後の具体的対応策など

語学科目では、目前の課題を果たすことに集中するばかりで学ぶ目的が見えなくなることによる意欲の低下が起こりがちであるため、「なぜ語学を学ぶか」を常に意識に置きながら取り組めるような授業展開を考慮する。単語習得、文法理解、運用能力の向上の先に、深い芸術理解や総合的な文化理解があることを意識させるため、教材のテキストにちなんだ絵画や音楽の視聴、歴史・文化背景の解説を挿入しながら、学生の関心を引き出し維持しうる授業運営を計画する。

演習科目では、学生同士の議論により結果的に個々の学生の意欲がいつそう高められていくような「補足」ができるよう、教員から学生への「コメント」というよりは「問い」の機会を増やし、学生の自発的な問題認識を促す。

所属学科 ドイツ文学科

氏名 教員③

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

アンケートを実施したどのクラスにおいても教員側のわかりやすさや(Q1)、意欲(Q2)に対して高評価を得ており、また授業の全体的な満足度 (Q12) についても高いスコアを得ていることから、教育内容においても、またその伝達やパフォーマンスにおいても大きな問題はないと安心している。特にかなり意欲的な内容の教材を選択し、春学期においてはその難易度の高さと予習の大変さから、授業の満足度を下げていたクラスも一部あったが、秋学期の同一クラスの評価においては「むしろ学べるが多かった」「生きたドイツ語を読む力を得た」といった高評価に変化しており、学生たちに「難易度の高い教材」でも、教員側の「何のために必要な学びなのか」といった説明が粘り強く十分になされれば、学生たちにはその想いが必ず伝わることがわかった。

2. 今後の具体的対応策など

現状のパフォーマンスを維持することがまずは大変なことであるので、これをしっかりと保つことと、特にそれほど高い評価が得ていない「学生同士の議論の機会やアクティヴ・ラーニングの実施」(Q4) は、単なるリアクションペーパーの回収やその共有に留まらず、授業内活動に有機的に取り組めるような工夫を早急に検討したい。

所属学科 ドイツ文学科

氏名 教員④

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

Overall the statistics and students' comments seem to be quite positive. I think I can generally continue with teaching like I did in the past.

2. 今後の具体的対応策など

I understand that for some students classes in a foreign language are difficult. I am trying to make this experience as easy as possible for students without lowering requirements at university level.

I will continue my efforts to have teaching materials digitally available, as I believe, students demand for this is increasing.

所属学科 文学部フランス文学科

氏名 教員①

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

全体的に授業の趣旨は概ね伝わり、学生の学ぶ意欲には応えられているのではないかと感じた。

Q4（アクティヴ・ラーニングの機会）についての数値が低かったのが気になるが、受講生数や授業の性格上、学生同士の議論等に割く時間が少なかったのは、ある程度仕方がないのかもしれない。

「専門基礎フランス語 A-2」の数値が全体的に低い。複数の教員が関わる授業なので、教員間の役割分担、連携等が十分に機能していないことを示していると分析した。

2. 今後の具体的対応策など

上記の通り受講生数や授業の性格上制限はあるが、自らが参加して作る授業という意識を学生にもってもらえるよう、今後、授業構成等を再考することにより、なるべくアクティヴ・ラーニングの機会を設けるようにしたい。

複数教員が関与している科目については、教科書の再考、学期全体のプログラムの吟味、教員間の情報共有方法の確認等を通して、今後、学科全体としてより有効な連携体制が取れるように考え直していきたい。

所属学科 フランス文学科
氏名 教員②

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

On average, the results proved that the students are quite satisfied with the classes. The option of individualising the lesson and the teaching, and NOT LEAVING ANYONE alone, reinforced by group work proved to be highly beneficial. This, of course, can only be achieved through small to medium size classes. The actual orientation of the University, geared towards profit-making, towards large number of classes Ould proved to be highly suicidal in light of this results.

2.

2. 今後の具体的対応策など

Improvement need to be made on the following areas
1) the level of classes are more and more disparate, and a appropriate way of teaching need to be devised to satisfied everyone with the progression of the class
2) Personnal expresson and oral activities are primordial, but are very time consumming and difficult to implement but ought to be done in the futur
3) Better knowledge, in Japanese, of Japanese literature and expressions need to be improved in order to make fruitful comparaisn between Japanese and French literature

3.

所属学科 フランス文学科

氏名 教員③

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

関係各位、

グラフの数字だけでなく、学生たちのコメントにも心を打たれました。

私は 25 年前、上智に入学した当初の苦労を思い出します。今の学生たちが満足しているのを見て、安心しました。フランスに研修旅行に行った学生の多くが、私に会ってフランス語の上達ぶりを見せてほしいと手紙をくれました。本当にうれしいですね
リヨンでみんなに会うのです。

2. 今後の具体的対応策など

皆さんに満足していただけるよう、さらに努力を重ねるつもりだ。

所属学科 フランス文学科

氏名 教員④

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

授業について、学生の意見をもとに振り返り、改善をはかるためのアンケートやまとめを実施くださっているご担当の皆様にお礼を申し上げます。

今まで学生同士のディスカッションなどの機会を設けることが少なかったので、昨年度はその点に留意したところ、そうした機会を持ったことを肯定的に評価する学生が多くあった。

2. 今後の具体的対応策など

今後も学生同士のディスカッションやその結果の発表の機会を設けたいと思う。ただ、グループディスカッションをしてもらっているときに、こちらがどのように各グループに介入したらよいのか、あるいはグループのなかで、あまり積極的に参加しない学生に対してどのように接したらよいのかという点などに課題が残っていることも自覚しているので、そうした点についてのアドバイスを探したりして、質の向上に努めたい。

所属学科 フランス文学科

氏名 教員⑤

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

語学の授業については、「思考する力がついた」「自分なりの目的を意識して持続的に取り組んだ」といった項目についてはやや平均を下回っており、受講態度が受け身になりがちであることが危惧される。反面、知識を着実に身につけるだけでなく、アクティブラーニングの取り入れによって言葉を使う喜びを知ることができたコメントは意義深い。

2 年生の必修科目である「フランス文学研究入門 B」は人数も多く試行錯誤してきた科目だが、今回は読み解く対象に対して学生からなるべく多く意見を出してもらうこと、添削や小レポートへのコメントを含め、フィードバックを行うことに関しかなりの努力を行なった。内容に関しても理論的な部分と実践的が結びつくよう工夫を凝らした。その結果は「知識を相互に結びつけることにより、多様なものの味方や考え方が身についた」と考えている人が多いことに表れていると考える。

「舞台芸術論 II」については 120 人近い講義であるが、小さなディスカッションの時間を設け、アクティブラーニングを増やす試みを行なった。その成果は数字には十分に表れていないが、今後もその方法を改善し、授業内の意見交換を充実させていきたい。

2. 今後の具体的対応策など

語学の授業においても思考力を磨くことができることを今後さらに示せるよう、文法の授業においても受講生の知性を刺激するようなテキストの抜粋を読んだり、文法事項にまつわる高度な考察も混ぜたりするようにしていきたい。学生本人に語学学習に独自の目標を立ててもらうことは大きな課題であり、少しでも考察を促すようにしていきたい。

文学入門については受講生の意欲に授業の充実度が左右されることが多いが、資料を毎回提示し、基礎的な部分を充実させていくとともに、対象とするテキストのヴァリエーションを増やして多くの学生が関心を持ちうる内容をさらに追求する。大人数で意見を聞いていくと他の学生に伝わりにくいというコメントに対しては、moodle で意見を回収するなど、他の意見交換の方法も工夫する。

舞台芸術論についてはオペラ・バレエについて知識のある学生とほとんどない学生の両方に有効な授業進行を引き続き探っていく。また大人数でも意見交換が可能なように、あらかじめ見た映像資料やテキストについて具体的な意見を書いてもらい、その上でディスカッションを行うなど、有効な方法を編み出したい。

所属学科 新聞学科
氏名 教員①

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

Q4 と Q11 を除く全ての設問に対して、全ての科目につき、学部科目別平均値と同等以上の平均値を得られた。自由記述の回答もおおむね好意的評価に基づく内容だった。

2. 今後の具体的対応策など

引き続きこれまでと同様に熱意をもって授業に取り組んでいきたい。

所属学科 文学部新聞学科

氏名 教員②

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

2023 年度は、新しい科目もあり、新しい試みがありました。主に英語科目が多いため、学生の英語力の差が見えてきました。シラバス作成の段階で次年度の履修者の実力や興味は知らなかったのですが、半年、一年間で社会状況もかなり変わってきている中で、メディア関係の 이슈、テーマにも学期開始の時点で変化が見えました。

受講者は積極的に授業に参加しつつ、双方に学びの場となり、英語でコミュニケーションができて良かったと思います。授業内では、必ず英語のみでコミュニケーションする、ディスカッションを行う、意見を書く、表現する、纏めることは強く勧めていたため、多くの受講者は笑顔で積極的に応じてくれたことは、自己への励ましになりました。

ダイバーシティの背景から受講者がおられたので、学科、文化、言語、国籍をこえた交流会、ディスカッションが可能になりました。仲間同士でお互いへのフィードバックが今回の初試みでしたが、受講者が喜んでいただけた様子でした。

2. 今後の具体的対応策など

- ・ 教員としてできる範囲で一人ひとりの受講者にフィードバックをしたい
- ・ もっと積極的に受講者の参加を促したい。
- ・ 成績のため受講している学生が多いのですが、何らかの形で、成績がなくても、必須じゃなくても、授業が楽しいという雰囲気をもたらしたい。
- ・ せっかく多様性の背景からの受講者がいるので、もっと学科をこえて、交流できる場になってほしい。
- ・ 教員として、もう少し SDGs や日本文化などをテーマにした内容の記事、ビデオを用意したい。

所属学科 新聞学科
氏名 教員③

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

結果はおおむね予想した通りであった。
アンケート回答者の数が少なかった。
引き続き、学生の理解や思考が深まるよう、授業を行っていきたい。

2. 今後の具体的対応策など

授業時間内にアンケート回答時間を設けるなど、回答者の数を増やすようにしたい。

所属学科 新聞学科

氏名 教員④

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

今回の調査結果を見ると、受講者数の少ない講義／演習ほど、受講者の満足度が高いことがわかるが、この傾向は、例年現れており、少人数での教育環境が満足度を上げることにつながりやすいことが、改めて証明されたといえよう。逆に、受講者が 100 名を越える大規模クラスは、相対的に満足度が低く出る傾向にあるが、3 年次以上の必修科目の「マス・メディア論Ⅱ」で、その傾向が顕著だった。同じクラスサイズの 1 年次の必修科目「コミュニケーション論Ⅱ」の結果や、一昨年の「マス・メディア論Ⅱ」の結果と比較すると、今回の「マス・メディア論Ⅱ」に対する結果は、突出している。このことから想定されるのは、2023 年度の「マス・メディア論Ⅱ」の受講者は、2000 年、21 年入学の学生であり、初年次の大学の講義において、オンライン授業が大半だった経験を持つ学生である。同科目の自由記述を見ても、テストの成績を見ても、同科目の例年の受講生に比べて、2023 年度の受講生は、理解のスピードが遅い傾向にあったことが類推された。

2. 今後の具体的対応策など

オンライン授業がほぼなくなったポストコロナの状況にあって、大規模講義における受講生の講義理解度がどのようなレベルにあるのか。コロナ前に戻ったのか、相対として、大規模講義における理解度は低下傾向にあるのかについては、今後、講義内で見極めながら、講義運営を工夫していきたい。

所属学科 新聞学科

氏名 教員⑤

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

全体として前学期より評価が良くなっている傾向が見られるものの、対応すべき課題が残っていると感じました。具体的には、ディスカッションや意見を述べる機会の多い授業が比較的高く評価された一方、フィードバックの少ない講義は低く評価される傾向が見られました。講義での学びを課題に反映できていない学生がいるなど、課題の設定やフィードバックの仕組みに改善すべき点が見えてきました。また、授業評価アンケートへの回答者が少ないため、より正確な評価を得るためにはアンケート回答率を高める必要があると感じました。

2. 今後の具体的対応策など

今後の具体的な対策としては、ディスカッションや意見を述べる機会をより多くの講義に設けること、フィードバックの機会を増やすこと、モノトーンな講義にならないよう工夫をすることに加え、授業評価アンケートの回答率を増やすことが、対策だと認識しています。特に、フィードバックの機会を増やすことで学生が自身の学びの状況や課題を認識できるよう、個別の回答に加え、講義内でのフィードバックの時間もしっかり確保していきます。

所属学科 新聞学科
氏名 教員⑥

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

おおむね想定範囲です。
アクティブラーニングについては、リアクションペーパーやレポートを含むという理解だが、アンケート項目には学生同士の議論、プレゼンテーションのみが例示されているのかもしれない。
口頭によるディスカッション、ウェブ掲示板のみならず、リアクションペーパーを複数紹介（本人に補足を促すこともあり）しながらのフィードバックも、議論といえるのではないか。

2. 今後の具体的対応策など

初年次の演習については、回答率 95% 平均値 4.9 と高評価であり、水準を維持したい。
講義科目はどうしてもアクティブラーニングの点数が低くなるので、24 年度から学生による発表を加えている。（メディアと文化 IVb）
二年次以上の演習に関してはややデリケートな部分もあり、とくにアンケートへの回答を促してこなかったが、方向性については考えたい。

所属学科 新聞学科

氏名 教員⑦

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

アンケートの結果を受けて、授業によってわかりやすい映像素材を見つけるなど自分なりに工夫して授業を行ったつもりでしたが、学生の側には必ずしも懇切丁寧なものとしては受け止められていないようだったことを残念に感じました。

講義形式の授業などでレポートやリアクションペーパーの多さについてはしっかり毎回提出する学生が一定数存在しています。多方で頻繁に欠席するのが当然という姿勢で授業を履修する姿勢の学生も目についていたので気になっていました。アンケート結果はそれが反映された結果だと受けとめられますが、「興味深い授業」「タメになる授業」だと理解してもらう工夫が足りなかったと反省しています。

実践形式の授業では映像作品の提出の途中経過を報告してもらってチェックするために提出課題を課していますが、新聞学科の実践系の授業ではどうしても実際に身体を動かして自分たちで取材・撮影したり、映像の編集をしたりしてもらわないと「学び」が深まらない性質があります。授業の早い段階でそのことを理解してもらって欠席をなくすようにしていきたいと考えてそうしてみましたが、それは肯定的に受けとめられていると感じました。

2. 今後の具体的対応策など

アンケート結果を読む限り、一部に実際に授業を受けてみたら当初の想定とは違ってハードな授業だったと読み取れるものなど、学生側の想定と教員に意識の間にはズレがありました。

このため、もっとシラバスへの事前説明で詳しく書き込んでいく必要があると感じました。実践的な授業に関してシラバスに細かく書きすぎることとはかえって柔軟性を失いかねない恐れがあります。しかし現在の学生気質なのか想定以上に予め知らせてほしいという要望が強まっているので、今後はより丁寧に細かく書いていく方が満足度も高く、不安を感じる学生が減少するのだらうと思います。

シラバスと初回授業でのより詳しく丁寧な説明にもっと注力したいと考えます。また反応がもう一つという科目については本筋を失わずに内容をもっと興味深いものに改善するように内容を見直していきたいと思っています。

所属学科	新聞学科
氏名	教員⑧

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

- ・演習については一定の評価を受けているようなので、継続していきたい。
- ・「人間行動とマス・メディアⅡ」（受講者数 149）や「マスコミ調査」（同 56）のように受講者数の多い科目において、Q4「学生同士の議論やプレゼンテーション等のアクティブラーニングの機会」の評価が低くなったのが気になる。

2. 今後の具体的対応策など

- ・演習については、受講者の学力差が大きいことに鑑み、個別指導のウエイトを今より増やしていきたい。
- ・受講者数の多い科目でも受講者の参加意識が高くなるようワークの時間等を一定程度設けるか、あるいはマイクを向けて発現を求めるなどのことを試してみたい。

所属学科	新聞学科
氏名	教員⑨

2023 年度秋学期実施 授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

- ① 学生は二極化しているように感じます。学生の学習到達レベルと、学習意欲や動機の強弱などを見極めることが非常に難しい。学習意識の高い学生と低い学生との差が大きく、底辺学生をボトムアップさせることと、学習意識の高い学生の欲求に応えることを同時に行うことは、相当に困難さを伴います。
- ② 学生の授業への準備の予習の時間と、復習の時間を見込んだ授業展開をすることがほぼほぼ難しい状況になっています。全体として学生の授業に向かう姿勢をどうしたら向上させることができるのか、悩ましい限りです。
- ③ 授業アンケートに応答しない学生が多く、授業時間内に授業アンケートを提出する時間を取る必要があるのは自覚してはいるが、授業カリキュラムの進行を削って、アンケート提出を授業時間内に繰り入れることはできずにいる状況です。

2. 今後の具体的対応策など

- ① なるべく、基礎的な学習項目から、応用的な高度な学習項目へとダイナミックに繋いでいけるような授業展開を試みるしかない。教員側の授業の準備をより綿密にして、いくつかのパターンや組み換え可能なカリキュラムを作って臨むしかない。日常的かつ、現在の最新の事象で、学生の興味や関心から、根源的な問いへ架橋するような、緻細でアクティブ、そして独創的な授業デザインを試みる。
- ② 知らず学生が楽しみながら考えたり、調べたりしてしまうような、魅力的かつ誘導的な反転授業のやりかたを模索したい。
- ③ 授業アンケートへの呼びかけが、阿るような呼びかけでなく、学生と共に、活気ある授業、活気のある大学を作っていくためのアイデア出しをお互いしていこうというようなスタンスを取れないか、模索してみる。積極的に授業アンケート参加へ誘導できるような呼びかけができるようにしたい。